強豪国から学ぶ日本サッカー育成法
How to upraise Japanese football from the lessons of the football powerhouse

1k09B174-1　　福田勝也
指導教員　主査 太田章 先生　　副査 礒繁雄 先生

【目的】

近年、日本のサッカーは大きく発展してきている。ワールドカップ４大会連続出場や欧州のビッククラブでプレーする選手など、世界で活躍する姿が目立ってきた。しかし、日本サッカーが発展してきたとはいえ、ワールドカップでは最高ベスト１６止まりであり、海外のクラブで活躍することが当たり前となっていない現状は世界のトップレベルとは言えない。また、現在の世界のサッカーに目を向けると、若い選手が堂々とビッククラブで活躍する姿が目立ち、クラブや代表のトップチームだけの発展ではなく、育成年代の発展がトップチームの戦力を突き上げているではないかと思った。そこでこの研究の目的は、日本のサッカーのさらなる強化・発展のために、世界の強豪国の育成年代の取り組みを参考にし、日本の育成年代の発展に必要なことを研究することである。

【方法】

日本の育成の発展のために、スペインとブラジルを参考にする。スペインは２００８年、２０１２年の UEFA 欧州選手権優勝、２０１０年の南アフリカ開催のワールドカップ優勝、２００９年には国際Ａマッチ３５戦無敗など、近年の国際大会において輝かしい成績を残している。また、FIFA ランキング１位であることや日本とスペインは体格的な差がほとんどないことも非常に参考になると考えた。ブラジルはワールドカップで５回優勝する実績を持ち、最多優勝の国である。また近年の成績において、ワールドカップの前哨大会であるコンフェデレーションズカップでは、２００５年、２００９年優勝、コパアメリカでは２００４年、２００７年優勝と輝かしい成績を残している。また欧州のビッククラブに多くの選手が所属し、個々のレベルが高いことも非常に参考になると考えた。また、スペインは欧州、ブラジルは南米であり、異なる環境でありながら国際大会で輝かしい成績を残していることは、日本にもチャンスがある。この２カ国の育成年代の取り組みを参考にし、日本のさらなる発展に必要なことを検討していきたい。

日本、スペイン、ブラジルの育成年代における環境面や指導・育成面の現状を調べ、日本が２つの国から参考にできる部分を見つけ、日本の育成においてさら
なる発展に必要なことを検討していく。

【結果】

日本の育成の問題点として、大きく５つ挙げられる。

①部活動において、飛び級や移籍が難しい
②部活動において、指導者の目が行き届かない
③全員に公式戦の場が設けられない
④プレッシャーの中での技術が身についていない
⑤大人本位の指導者が多い

①と②について、日本の育成の特徴である部活動とクラブチームという制度自体を大幅に変えて改善していく事は難しい。その中で「トレセン制度」や「特別指定選手制度」など、日本独特のスタイルで補っている。③については、スペインは子供から大人までが長期リーグ戦を戦い、また、各クラブ複数チームが出場可能である。日本もリーグ戦の導入や複数チームの出場など、全てではないが環境が整ってきている。④については、スペインは長期リーグ戦、ブラジルはストリートサッカーを基盤としたミニゲームを数多くこなすことで、プレッシャーの中での技術を身につけている。両国ともに、サッカー（＝ゲーム）を数多くこなしていることが共通点である。⑤について、スペイン、ブラジル共に選手自身が自由に育っていく指導を行っている。日本も日本サッカー協会が「Players First」を掲げているが、日本の指導者全員に浸透していないのが現状である。

【考察】

現在、日本サッカー協会を中心にさまざまな取り組みが行われているが、方向性は間違っていない。日本独自の育成スタイルの中で、選手のことを一番に考えた「Players First」の環境が整ってきている。「Players First」の環境が整ってきているからこそ、日本全体の指導者に浸透させることが急務である。また、リーグ戦の導入に伴って、トレーニングも指導者自身が見つめ直し、サッカーはサッカーをすることで上達するということを常に念頭においた中でトレーニングメニューを考えることが必要である。このように、日本の育成環境は整ってきている中で、日本独自のサッカー文化を大切にし、その中で発展や改善を繰り返し、日本らしい育成によって日本代表や日本サッカーの強化に努めることが必要である。